

3 平成 13 年度 幹事活動報告

3-1 平成 13 年度 幹事長活動報告

芳賀 俊哉（千葉 4）

1 はじめに

この報告書は、今年度の日本学連幹事の成果を書き記すものである。年度当初、幹事長不在の日本学連にあって、私は任期の途中から、幹事長というポストを務めさせていただいた。何かと至らない部分の多い中、これまで支えてくださった各位には心より感謝する。

この活動報告書という冊子の中で、この「幹事活動報告」という部分は日本学連の内情を広く知っていただくためのページである。今年度の幹事会の活動をお伝えすると同時に、一人の学生オリエンティアとして感じたところもお伝えしたいと思う。

2 幹事長の役割

幹事長は、幹事会を統率し、総会を招集する権限と義務を持つ。また毎年度の幹事会活動が円滑に進むようにするのも、当然幹事長の役割である。

実際には、年数回の幹事会と総会に際し、議案書を作成し、関係各位に送付することで会議を招集する。その前段階として、メーリングリスト上の情報交換等によって議論を進行する役目もある。

当然ながら、幹事長不在では幹事会は成立しない。そしてまた、学連に所属する各委員会も機能しない。全て学連の決定事項は、幹事長に集約されると言ってもよいと思う。

3 幹事会

幹事会は、幹事長によって召集され、各地区学連の渉外代表者を含む幹事によって、学連に関する諸々を話し合う会である。

全国に幹事が散らばっているため、それほど頻繁には幹事会を開くことは出来ない。年に数回、会場となる宿舍を借り、日頃顔を合わせることが出来ない分を補うかのように1昼夜をかけて長い会議を開き、議論と決定を行うのである。

メーリングリスト上の議論よりも、やはり顔を合わせた議論の方が話はまとまるもので、手間と費用をかけてでも、出来れば数多く顔を合わせる機会があったほうが良いと感じる。

幹事会には、幹事以外にも、理事の方々や議事の関係者を呼ぶこともある。先輩方や知識のある方々の意見をお借りし、助けられることも非常に多い。

余談だが、全国の代表者が集って面と向かって話すことができるのは、この幹事会くらいのものであろうと思う。自分たちの参加している大会がどのようにして決められているのかを実際に身近な問題として知ることが出来、また各地のオリエンテーリング愛好者と話が出来るというだけでも、それは楽しいものである。

4 インカレ改革

今年度の幹事会は、なんといってもインカレ改革に尽きる。議論の中心にはいつもインカレ改革

があった。今年は特にインカレ改革について章を置き、その顛末を報告することにした。

今年度大きな問題と
改革案が出るまでの経緯
して持ち上がったの
が、インカレの競技規則他に関する見直しについてであった。

これは日本学連の存在意義とも言うべき「インカレ」の開催について、現状のままでの実現が困難になったために発した議論である。何故、今までのままで開催が難しくなったのか。

1 つには参加者である学連加盟員、即ち学生オリエンティアの人口の激減に因る。例えばインカレの競技のひとつ「クラシック」の場合、花形であるエリートクラスに出走するためには、知ってのとおり数々の選考レースを通過しなくてはならない。通過を果たした出走者の人数枠は日本学連「インカレ実施規則」に定められており、これは 96 年の改正以来変更されていない。これによって、エリートの競技レベルが全体的に下降するという現象が起こり、ひいては選考レース自体の意義をも問われる局面にまで達することとなった。また男子リレーの場合、人数が 4 人揃わず出場すら困難である大学も存在した。

2 つ目には、運営側の負担の増加に因る。インカレを運営するのは、実際には学生 OB を中心とした社会人の方々がほとんどである。だが、オリエンティア人口の減少に伴い、運営側の人数もまた減少しているのが現実であり、年々運営に関わる方々の負担が増大してきている。またインカレは、大会開催地を選定する際、関東近辺とその他の地域とを 1 年おきにローテーションで決定している。これは、関東の競技人口が他の地域に比べ多いことなどに因るものだが、現実的には関東以外の地域での人手不足が著しく、現状の競技・運営形態では大会自体のレベルの悪化を招きかねないという切迫した状況であった。

3 つ目には、世界の OL 界の変化に伴うものである。これはリレーに関しての話になるが、国際舞台でのリレー競技は、近いうちに全て 3 人制に集約される見通しである。

これらの経緯があって、技術委員会からの提案に則って、インカレ実施規則の改正を含む、インカレ改革に向けての議論が行われることとなった。

議論の顛末
議論の大きな目玉となったのは、クラシック及びリレーの競技形態の変更に関する事項についてである。先ほど前述した改革の目的を満たし、且つインカレ自体の魅力がなくすることがない、その方向性を探るのは困難な作業であった。全国の加盟校には、アンケートを実施し、クラシック・リレー共に 2 案ずつを挙げて、より望ましい方の案を選んでもらうことになった。だがその結果、各大学によって事情は大きく異なってくることもあって、数字の上での結果は出たのだが、結局はその数字をにらみつけながら、幹事会での判断をする他なかった。

クラシックについては、競技レベルの確保と運営の負担軽減の見地から、「競技者削減案」と「二部制導入案」が提案されたが、検討を進めるうち、「二部制案」は余計に運営の負担を増加する恐れがあることから立ち消えとなり、「競技者削減案」に的がしぼられることとなった。だが、原案ではエリート枠の幅が余りに大きい（男子 90 60、女子 60 40）という意見が各大学からも幹事内部からも聴こえ、そのまま導入することは望ましくないものと思われたため、代替案が検討された。まず、削減幅を半分にする案が挙げられたが、約 30 分の削減が運営に効果をもたらすかどうかの疑問と、先延ばしをしているだけの甘い案だということから、幹事会の中では「90 75・60 50」案と「90 60・60 40」案で真っ二つに分かれた。最終的には、性急な変化はやはり望ましくないという意見から、「2002 年度は 75・50 に枠を変更する。2 年連続インカレ参加エントリー数が 900 人を下回るなら、その次の年度からは 60・40 に枠を削減する」という申し合わせ事項が作成されるに至った。また、大幅なエリート枠削減のインパクトを軽減するために、各地区学連に配分される枠数を 1 から 2 へ増やすこととなった。

リレーについては、3 人制への移行の是非を議

論した。各大学のアンケートの結果，人数の少ない大学からも「4 人制維持」の声が挙がるなど，根強い 4 人制人気が垣間見られたが，現実として「ウイニング 1 人 50 分・4 人制」は無理があった。運営時間に限界があること，テレイン選定に多大な制約がかかることを考えると，とても苦しいのである。かと言って，ウイニングタイムを減らすのにも限界があった。日本のテレインの性格上，もしくはインカレというイベントの性格上，会場から山林内へ入るまでの間には必ず道走りレグを入れざるを得ない。この動かしがたい事実に対して，ウイニングタイムを減らすことを目指すとすれば，山林内でのオリエンテーリング時間が非常に短いこととなる。このリレーについては，現時点では結論を見ておらず，3 月の総会時に決定する予定である。

また，ショートについての意見も挙がったが，これは来年度以降に持ち越された。選考レースの意義という件に関しては，むしろクラシックよりショートの方が問題が大きい。私の力不足のため，この件については発案にとどまることになりそうであるが，来年度以降，規約改正へ向けて議論を請いたい事項の一つである。

その他の規約変更 その他 細かい規約の変更もあったので，簡単に下に記す。

ここでは，煩雑になるので議論の内容は省略する。お手数だが各幹事会・総会の議事録を参照していただきたい。

現時点(02 年 1 月)で決定している事項は以下の通りである。

- ・計時方法の多様化
 - パンチングフィニッシュを認める
- ・裁定委員の交通費等の不支給
- ・クラシックのスタート方式の簡略化
 - プレスタート方式に限定しない
- ・開会式当日イベントの短縮

事前のスタート順抽選，テクニカルミーティングの省略など

これらはそれぞれ，インカレ競技の制約を緩和するものである。それだけ，運営側の負担はぎりぎ

りのところにあるのだということを理解していただきたい。

このように，インカレもまた一定のものではなく，常に状況によって変化していくものである。今後はさらに競技者人口の減少が懸念されるところであり，苦しい選択を迫られることもあるだろうが，自分たちの世代でのインカレの最善の形とはどういうものなのか，今年度の改革を振り返りつつ考えていって欲しい。

5 その他の活動

この章は，今期幹事会で主に取り上げられた議事について，簡単に述べていくものである。

ユニバーシアード援助金 これも日本学連の収入減に伴って見直された事項の一つである。過去，日本学連では，2 年に 1 度行われる世界大学オリエンテーリング大会（通称ユニバー）の選手団に対し，年間 50 万円，2 年間で計 100 万円の援助予算を設定していた。しかし，現状では学生のユニバーへの参加は少なく，援助金を減額した際にも学生全体に対する影響は少ないと思われることから，減額を決定した。

そもそもユニバーに対する援助は，日本学連の目的として，学生競技者の競技環境のバックアップをすることにあるところから端を発している。世界の舞台へ羽ばたく学生の後押しをするための援助金の存在であった。故に援助金の減額は本来，望ましい選択肢ではない。

このことから，財政状況も鑑みて，最低限の援助自体は継続することになる。だがここで，減額の幅をどのように定めるかで議論が難航した。最終的には，用途を「報告書関連費，大会参加費，大会中の宿泊費，オフィシャル交通費」のみに限定し，その支出額に応じて援助金を出資するという結論を得た。年 35 万円，2 年で 70 万円を予算として計上し，上記の用途に関してのみ使用していただくことになった。金額の根拠は，2000 年

ユニバーの会計報告によるものである。

日本学連の活動がこのように年々制限されていく中で、今後は全体を視野に入れ、予算の使い道についても重々議論が進められていくことを望む。

学連加盟員数の減少は現在とても著しい。ここ数年で言うと、年間で 200 人のペースで減少しており、今年度は約 1200 人である。

止まらない減少傾向を少しでも食い止めるべく、今年度の幹事会では微小ながら対策が練られることとなった。

第 1 には、ここ数年配布している新生歓迎よこのパンフレットの配布についてである。今年度まで使用していたパンフレットについては、活用していただけただけの大学も多いと思う。実際、パンフレットの配布を希望している大学は少なくないようである。しかし、その効果については疑問視せざるを得ないところでもある。日本学連としては、追い詰められた財政の中で少しでも効果のある活動を行いたいことから、パンフレット配布の是非についても再考を余儀なくされた。そこに、村越真氏が世界選手権の広報活動に際して作成したパンフレットの存在を知り、幹事会にはわかに盛り上がったものである。結論として、来期の新歓パンフレット配布については、今年度まで使用していたパンフレットの残部と、村越氏のパンフレットの二段構えをとり、各大学の幅広い用途に沿うように改善を試みることとなった。

もうひとつの対策は、新歓マニュアル集の作成を行うことである。これは、新生歓迎行事をまとめた形で整えることの出来ない大学に対して、またはそうでない大学に対しても、他校の新生歓迎行事の様子を伝え、ノウハウを共有し、新生歓迎行事を全国的に厚みのあるものにしようという壮大な試みである。これに関しては、現時点ではそれほど多くのマニュアルが集まっておらず、またどのような形で還元することが出来るのかも不明瞭な状態である。

日本学連の財政 これも加盟員減少に伴う発議である。詳しくは会計の金田君が報告してくれると思うので予算案の内容については省かせていただくが、今期の収入額は(1月現在、) 予算よりも大幅に減少する見込みである。前述したユニバー援助金の削減などからもお分かりかと思うが、日本学連の支出部分で削減しうる部分を見出すのはとても困難なのである。

そこで、収入の増加に目が向けられることとなる。日本学連の収入は主に学連加盟費によるものであるが、これを増額することは加盟員減少に拍車をかけることにもなりかねず、望むところではない。頼みの綱は賛助会員からの収入増加なのであるが、これも「フィードバック制度」(賛助会員の出身大学が所属する地区学連に対し賛助金の中から補助金を支払う制度)の浸透が薄いためか、思ったような収入を得られないという状況なのである。

結局のところ、日本学連の財源は学連加盟員によって賄われるべきものであり、今後は、新人勧誘を強化していく一方で、賛助会員増加の方策を整えるなどして、少しでも収入の増加を図る他ないと私は考えざるを得ない。苦しい状況は当然だが、なるべく前向きな方向へ学連は歩んでいきたいものである。

6 総会の様子

私は、幹事長就任まで、一切学連という組織に関わったことがなかったために、初めて総会に参加した第 34 回総会の時の印象はとても強い。

特に、参加率の異常な低さには驚かされる。私が初めて召集した第 35 回の時もそうだが、総会が開会できる定足数である加盟校の過半数が揃うかどうかすら危うい。2 回とも綱渡りのような気分で集まりの悪さを見守っていたものである。もちろん、我々幹事の側にも問題はあるだろう。自省すれば、各大学への総会のアピールの低さは、本当に改善をしなければならないところだと思う。しかし、自らが参加する日本学連の総会に、

委任状も提出せず無断欠席する大学の多さには落ち込んでしまう。日本学連総会は、毎年数回だけ行われる、最高の決定機関である。現行の学連規約では、「加盟校は連続して日本学連総会を欠席した場合、準加盟へ降格されることもある。」(第 11 条)とあり、今後はその執行も止むを得ないものと思われる。

本来総会は、我々幹事が直接各大学の代表者から意見を聞くことの出来る、貴重な場なのだ。参加することで、自身が学連を、もしくはインカレを動かすことが気軽に出来るようになるのである。面倒がらずに、気軽に顔を出して欲しいと思う。

7 幹事会の様子

この章では、今年度の各幹事会の様子をご報告する。詳しいことは議事録を参照していただければよいと思う。

第 1 回 例年通り、6 月の第 1 週に行われた東大大会にくつつく形で行われた。東大(駒場)の総会が終了後、次の日の大会会場の群馬県赤城近くまで移動。夜になって入浴の後、サッカー中継を見たい気持ちを抑えつつの会議が行われた。毎年 O L K の幹事には非常にキツイ日程であるが、今回はしっかり出席してくれた。

私はその日に就任した直後ということで、顔見せという形で座っていただけだったが、副幹事長・武村君の号令の下、整然と会議が行われた。

内容は、1 年の初めということで、今後の幹事会の予定の確認や、その日の総会の内容確認に終始することが多い。今年は加えてインカレ改革の発案があった。

第 2 回 これはだいぶ間があいて 10 月、早慶戦に伴って、東京の拝島旅館(駅から数分!)で行われた。遠距離移動の幹事を考慮して、幹事会というものは大抵は毎回午後から行われるようである。

私は初の議長ということで、右も左も分からないまま、周りに助けられながら議事進行を行った。

この幹事会は、11 月のインカレショートのと

に併せて行われる総会の前準備という形で行われるもので、今回はインカレ改革、ユニバー援助金という 2 大議案に時間を大幅に割り、案の定日付けが変わるまでの会議と相成った。

第 3 回 毎年 1 月に行われている。主に引き継ぎ幹事会という形で、新旧幹事の初顔合わせとなる。それ故、この幹事会の時点で新幹事が決まっていなないと、前任の幹事は非常に肩身の狭いおもいをする(わたしはどうやらそうなりそう)。今年は 1 月の末、ジュニアチャンピオン大会の前日に行われる予定である。

議案は主に、インカレ改革の決着をつけることであろうか。JOA との関係改善に向けての話も持ち上がっているだけに、気の抜けない会議となることは想像に難くない。

8 最後に

私が幹事長という役目を受けてからあっという間に年が変わろうとしている。その間、私は幹事長という役目をほとんどまっとうできなかったと思う。周りの幹事に助けられて、どうにかこうにかここまでやってきたが、正直、私のような者が幹事長を担うのは相応しいものではないと言わせてもらう。私は、インカレを開催するただそれだけのために、幹事長不在の学連の中へ行き、幹事長という役目を受けようと思った。今となれば、それが如何に軽しいものだったか。

しかし。ひんしゅくを覚悟で言うなら、こんな私でも出来るようになるのである。どこかで聴くような、幹事長という役割の重さや大変さを真に受けて、この世界を敬遠しているのなら、それはたんなる食わず嫌いだろうと思う。それよりも、自分が参加する、自分の選んだスポーツの、それも最高の舞台を、まさに自分自身が担うという感触はとても誇らしいものだと思わないだろうか。

何より、幹事会の面々に恵まれて、楽しい時間も享受することが出来た。色々な意味で、幹事の皆には心からお礼を言いたい。

とはいえ、まだこれを書いている時点では任期

が残っている。少しでも日本学連を「お手伝い」して、任期を終えたいと思う。

今後は、学連加盟員の減少から、様々なトラブルが現れることだろう。より良い競技環境を築けるよう、後の代の人間には理想を掲げて任に当たって欲しいと思う。

学連加盟員の読者には、ぜひ興味を持って我々

と関わりを持って欲しい。幹事もまた学生である。決してインカレは赤の他人が作っているものではなく、あくまで自分たち学生が作っているものなのだからきちんと理解していただきたい。そして、少しでも幹事の活動に手を貸していただけるよう、心からお願いしたい。

3-2 平成13年度 副幹事長活動報告

武村 謙（北海道4）

1 はじめに

副幹事長とは中途半端な役職であります。この事は今までの副幹事長が書かれています。副幹事長の仕事とは

幹事長がいなくなったらすぐ代行
必ずナンバー2
とはほとんど同じ意味です。

これは前回の活動報告書の副幹事長報告にある文章をそのまま引用しました。私が副幹事長を依頼されたときこの文章を読んで副幹事長の仕事内容をイメージしていました。しかし、私が副幹事長に就任した時には幹事長が不在でしたので2ヶ月間幹事長代理として仕事をする事になり、とは同じ意味ではないことがわかりました。芳賀君が幹事長に就任してからは文頭にあるように中途半端な役職になりました。

2 幹事長不在

先述したように4,5月は日本学連には幹事長が不在だった。こんなことは日本学連始まって以来の出来事だろう。この幹事長不在によってイン

カレの開催も決まらず日本学連の存在意義が失われつつあったと思う。また加盟員数の減少に伴って幹事長に限らず学連幹事離れの減少が起きている。これは日本学連だけではなく地区学連にも言えることである。確かに学連の役員になれば他の加盟員より仕事と責任が増えるだろう。しかし「誰か」がやらなければ学連の仕事はストップするし、インカレは開催されない。その「誰か」も皆さんと同じ加盟員であり学生である事を加盟員には考えて欲しい。

3 幹事長代理

2ヶ月間幹事長代理をやる事になりました。昨年北東学連地区代表幹事として地区学連、日本学連両方に接する事ができ、それなりに学連の運営の経験があったので思ったより幹事長代理を円滑に行えたと思っている。毎年幹事長は関東（特に東京近辺）の大学の人が行ってきて副幹事長は地方の人、という暗黙のルールがあった。やはり何だかんだ言ってもこの業界は関東が中心であることには変わりはなく、地方が関東を追いかけている形だと思う。一方で近年電子メールの発展により地域の差が一昔に比べて格段に縮まっている事がある。この事によって北海道という島に住んでいる私にも2ヶ月だが幹事長を行うことが

できたと思っている。しかし、この 2 ヶ月は地方の人が幹事長をやることは簡単ではないことを感じた。普段事務局に行けず、また他の幹事や理事などと幹事会でしか会わない面々が多く、顔や性格がいまいちわからない相手とのメールのやり取りをすることがつらかった。

4 幹事会

今年の幹事会の特徴として 4 年目が多く、幹事会のたびに新しい幹事が加わってきた。特に後者の方は議論を進める上で知識、情報の差が生じてしまい、幹事全員で議論を進められないという弊害があった。これは先代や他の幹事を責める訳ではないができるだけ 4 月の時点で幹事全員が決まっています顔を合わしていることが望ましいと思う。こんなえらそうなことを書いておきながら来年度の幹事が決まっていないうのだが（ICS 前々日現在）。

5 副幹事長としての仕事

副幹事長の仕事として幹事長の補佐以外ルーチンワークというものはない。例年何か副幹事長が立案をしたりしてきたそうだが私は幹事長の補佐で終わりそう。今年度はインカレ、日本学連の変革の年度と勝手に思っている。私の役目はこの変革をより良いものにするために幹事会の中で一番の古株として意見を出していく事だと思っている。また、来年度の新幹事への教育が日本学連存続のための大事な仕事だと思っている。幹事会で話し合われた議案については幹事長の芳賀君が書いていると思うので私からのコメントは差し控えたい。

この活動報告書が発行される頃にはほとんどの仕事が終わっているはずだが、最後に幹事長の芳賀君をはじめとして他の幹事と共に残りの任期を精一杯がんばりたいと思う。

3-3 平成 13 年度 会計活動報告

金田 岳志（東京工業 4）

1 はじめに

前年度インカレのときに、会計の仕事を引き受けることとなった。研究室が忙しいことは分かっていたのだが、4 年生でもできるという言葉信じて頑張ることとした。しかしながら、研究室が予想以上に忙しく、いろいろとご迷惑をおかけしたことと思う。以下に、会計に関わる事柄について項目ごとに触れてみる。

2 加盟員の減少について

会計だけの問題にはとどまらないが、加盟員の

減少は大きな問題となっている。加盟員が千人を切るのも、数年後には現実となりそうである。少子化の影響やサークル離れなどの要因が考えられるが、どうすれば良いかという具体的な解決策は見出せないでいる。会計への影響は、収入の減少であり、現在の規模を維持していくのは難しくなっている。

3 賛助会員

前述の収入の減少を少しでも小さくすることを目的とし、より積極的に賛助会員を集めていくこととなった。OB・OG の方々からのご支援をい

第2部 活動報告

ただき、収入を少しでも安定させ加盟員の増加をはかっていければと思う。

4 ユニバ - 援助金の減額

一昨年より議論されてきたユニバー援助金については、予算規模の縮小に伴い2年で100万円から70万円へ削減することとなった。また、学連として援助を行うのだから、ユニバーセレに参加する方々に賛助会員になってもらうこととし

た。

5 おわりに

いくつかの作業は残っているが、1年間いろいろと勉強になりました。幹事へのなり手が少なくなっているようですが、ぜひ1度挑戦してみてください。最後に、会計報告提出まで少しの間ではありますが、しっかりと仕事を行っていきたいです。

3-4 平成13年度 広報部活動報告

小林 由幸（新潟3）

1 はじめに

広報部の仕事内容といえば、いぶきの発行、である。

その他、幹事会、総会の議事録をとる、といったものもあるが、やはりメインはいぶき作成にあると思う。

今年度は、この原稿を書いている時点で、いぶきを3号発行している。

それぞれの内容等について簡単に述べると、

1号（6月3日発行・16ページ）

1. いぶき、日本学連の紹介
2. 学連幹事、各地区学連、委員会、理事会の紹介
3. お知らせ
4. その他

東大会にて事務局長にいぶきを渡し、配布してもらった。

内容は例年通りとなってしまう、変化の無いものとなってしまった。

2号（9月19日発行・22ページ）

1. 学連合宿のお知らせ
2. インカレショート関連

3. インカレ関連

4. 幹事会、総会の議事録

5. 幹事紹介

9月に発行する予定はなかったのだが、原稿が思ったより溜まってしまったので、発行することとなった。

3号（12月14日発行・14ページ）

1. インカレショート2001結果
2. インカレ要項3
3. 学連合宿の案内
4. 幹事会、総会の議事録

予定ではインカレショートの直前号を発行する予定だったが、原稿が集まらなかったため、見送ることとなった。

インカレショートのシード選手を発表するのはいぶきの1つの役目であったと思うので、それができなかったのは残念だった。

2 編集

自宅にパソコンはあるものの、ネットにつないでいないため、大学のパソコンに原稿を送ってもらい、フロッピーに入れて編集。添付ファイルが

大学のパソコンだと読めないので、友人のパソコンに原稿を送ってもらうという形をとった。原稿を送ってくれた方、それと友人には多大な協力をしてもらった。

3 製作

大学で印刷できるため、印刷そのものは 1 人で行った。折り込み作業は大学の部員に呼びかけ、協力してもらった。この作業はかなり大変なので助かった。1 部 1 部折りこみ製本、封筒に入れやすい大きさに折ってもらった。

4 配布

本来なら配布をできるだけ大会会場等で行うべきなのだろうが、今年度はそれができていない。これは改善すべき点の 1 つであると思う。

5 郵送

封筒と宛名シールは事務局から郵送していただいた。宛名シール封筒にはり、いぶきを入れ糊付け。これもなかなか大変で、1 人では大変だと思われる。私のばあいは、友人に手伝ってもらったので、これも助かった。

その後、郵便局に 200～300 部もの封筒を持っていくことになる。

広報部長としてやってきたが、会場配布を行っていない、内容が乏しい(新しいアイデア、企画が無い)、編集がぎりぎりでおおざっぱ、様々な方面への原稿依頼ができていない、等々反省点を挙げればきりが無い。

だが、本当にいい経験をさせてもらっていると思う。

最後に、これまでやってこれたのはたくさんの人の協力のおかげであり、その協力に心から感謝すると共に、これからの作成を頑張っていきたいと思う。

3-5 平成 13 年度 事業部活動報告

井上和仁(筑波 4)

1 はじめに

本来、日本学連事業部の仕事は、インカレ関連の行事の運営と、その他日本学連主催の行事を取り仕切ることである。しかし、今年の自分の任期に限って言えば少なくとも後者については全くすることができなかった。理由は前任者の事情で新たに十一月末に選出されたこと、また引継ぎを行う事ができないままになってしまったことがあった。このことは、学生の責任感の無さを示している。引き受ける時の安易さから責任感の欠如

が来るのかもしれないが、このようなことは全体のためにも繰り返されるべきではない。以下、今年行った活動について述べる。

2 インカレ関係

今年度の日本学生オリエンテーリング選手権大会(以下インカレ)は栃木県矢板市、塩谷郡塩屋町で行われた。事業部の大半の活動がインカレ関係の業務であるということの関係で、今年度の事業部長は関東地区、その中でもテレインに関係のあった筑波大学から選出されることとなった。

第2部 活動報告

インカレの主催は日本学連であるが、実際に運営するのは競技面担当としてインカレ実行委員会が主管となって運営している。事業部は学生が競技面には関与できないという事もあり、イベント関係の運営を担っている。毎年、開会式や表彰式、インカレ後夜祭などの運営を行っているが、今年度は以下の事業を行った。

3 インカレガイドの発行

発行は事業部となっているが、実質作成して頂いたのは関東学連、特に東京大学の有志の方々であった。自分の力不足で迷惑をかけたにも関わらず、素晴らしいインカレガイドを作成してもらい、感謝は尽きない。来年以降については、アンケートの回収の仕方、印刷、編集を依頼する地区学連との関係、配布のやり方など、年毎によって異なる課題をどう処理していくかという問題が残る。また、今年行われた「みんなでトト郎」が引き続き行われるならば、その冊子とのお互いの位置付け、差異化をどうしていくかというのも重要な課題である。

4 開会式の運営

毎年ならば、開会式の事前準備の手伝い、当日の進行などを行うのであるが、今年は特に依頼をされなかった。代わりに開会式後、閉会式後会場の掃除を手伝う事となった。また、開会式での優勝旗などの返還に伴うインカレ実行委員会からの諸連絡を学生に行った。

開会式に関しても、本来は学生が中心となつてやる可能性が高い。その場合の運営担当大学（又は学連）の協力を得られるかどうかという問題は毎年難度の高いものであり、各加盟員の意識にかかっている。OB・OGのいわばボランティアによって成り立っているインカレへの学生側からの協力という点で、改善のための余地は多く、学生主体のインカレに向けての意識向上に対する必要性は非常に高く、また緊急的問題と言わざるを

得ない。

5 インカレ後夜祭・講習会の運営

上記の業務がそれぞれの理由で各団体に委託されたことにより、今年度の事業部の業務はインカレ後の後夜祭、講習会の運営がそのほとんどを占めることとなった。しかし、前任者、昨年度の責任者からの引継ぎが全く行うことができず、手探りで始動となってしまった。また、始動時期も遅く、組織を固めるのも直前となってしまった。よって関係者や参加予定者の方々にはご迷惑をおかけすることになった。要綱を配布するのもしぎりぎりとなってしまい、一時期は開催されないのではという心配まで与えてしまった。また、告知が遅いために、十分に認知されなかったのではという懸念も生じた。要綱は、紙媒体とweb上でのもの、二種類用意したが、それと共に、各大学のweb上の掲示板などへの書き込みを行った。運営担当校の選出も難しく、何校か打診したが、受諾されたところは少なかった。しかしこれによって団体としての連絡のしやすさやまとまりは楽になった。後夜祭では、予想以上の人数が集まったが、参加する学生の自己管理能力やモラル、また大学毎の新入生に対する管理（聞こえは悪いが）の欠如が頻繁に見られた。参加者もその場を形作る一員である以上、最低限の一般常識を持って参加するべきであろう。学生ということでの甘えが各所に見られた。講習会では前年度、また、来年度の都合により、今年はやや競技的な方向性を打ち出した。インカレ実行委員の方による解説なども行い、講習会実行委員の尽力もあり、全体として比較的うまく運営する事ができた。だが、総括として、連絡という面に関して参加者、インカレ実行委員会、旅行会社との連携が改善される余地がまだ多く残っている。また、引継ぎという面に関して事業部としてのシステムを確立するべきであろう。

6 最後に

今年度、事業部の活動は後手後手にまわってしまい、関係者各位にご迷惑をかけてしまった。次期以降はそのような事の無いように早めに組織を固め動き出すようにして欲しい。また、各事業に向けての運営の中で、様々な関心の低さを痛感した。誰かがやってくれるではすまなくなっているのが近年のオリエンテーリング界を取り巻く現状であり、その現状と各加盟員の意識とのギャップが各事業、とりわけインカレの開催への障害の一つとなっていると考えられる。各事業に対する参加する側の意識、それを運営する側への関心

の低さは年を経るごとに浮き出てくる問題であろう。しかし事業部の業務は学生への委託という部分が大半なのでその運営への学生側からの積極的な参加が求められるので困難が予想される。特にインカレ関連の事業にはその性質から実質的には限界があるが、学生が主体となってやれることも多いと感じているけれども実際には学生側から提供する事は出来なかった。まずは実行委員会への任せっきりでなく運営者の視点を持って積極的に協力する事、また、そのような学生を受け入れていけるシステム作りが必要だと思う。

3-6 平成 13 年度 事務局活動報告

的場 洋輔（東京 4）

1 はじめに

平成 13 年度という 1 年間事務局長を務めさせていただきました、とはいうものの、ほとんどまともに仕事をこなしておらず多くの人にご迷惑をおかけする結果となってしまいました。この場を借りてもう一度お詫びいたしますとともに、事情を少しですが説明したいと思います。

2 1 年間で振り返って

日本学連事務局長をやることを引き受けようと思ったのは事務局長を務めた年の前年、平成 12 年夏でした。当時、幹事長であった東京都立大学卒の井下田さんに持ちかけられました。最初はその年度（つまり平成 12 年度）の会計監査を頼まれていたのですが（その翌年には幹事長もありうる）それは断りました。何度も、お願いされるうちに心が動きつつあったのですが、そうしているうちに、会計監査ではなく翌年度（平成 13 年度）

の事務局長をお願いされました。私は 2 年生の頃（1999 年）から日本学連事務局員をつとめておりいくら経験があったので気軽に引き受けました。今思うと誤りであったのかもしれませんが。

その年の冬、学校の履修登録でミスを犯してしまい、翌年の冬（平成 13 年冬）は大変なことになるのが決定的になりました。この時点ですでに日本学連総会で翌年度の事務局長を承認されていましたが、事務局長を辞退すべきであったかもしれません。

そうこうしているうちに平成 13 年 4 月、正式に事務局長になりました。

本来は 3 年生が事務局長になるものなのですが、私は学連登録 4 年目でした。これは、つまるところ 3 年生世代の事務局員経験者に適任者がいないと当時判断されたからです。今思うと、私がこの 1 年間でやった仕事くらいは誰にでもできることであり、誰でも良かったと思うのですが、当時は

第2部 活動報告

適任者がいないと判断され、私が事務局長になりました。そういう状況でしたので、事務局の仕事をちゃんと知っている3年生はおらず、事務局員の構成は、事務局長1人の下に事務局の仕事の経験が乏しい事務局員が数名という構成でした。

この中には平成13年度関東学連事務局長を務めた早稲田大学の小田君（彼は優秀です）も含まれますが、彼には関東学連の仕事があり、日本学連の仕事に依頼するのはある程度控えざるを得ませんでした。

そういうわけで、最初の課題を事務局員の指導、未来への人材育成と決めました。事務局長1人で全ての曜日事務局員を指導するのは大変なので、事務局開局日を平日全てではなく、月・水・木に絞り週3日、事務局員に事務局の基本的な仕事を教えました。

その一方で、加盟登録に関する作業も同時に進めねばなりませんでした。当時、私はそれまでに事務局員を2年つとめていたために、事務局の仕事に対しおごりを持っていました。そのために、前年度の事務局長である平沢君（彼は僕よりも事務局員経験は短く、また東大OLKの同期でもある）に細かく仕事の内容を聞くことを怠り、その結果加盟登録作業の遅れ、不備につながるようになりました。

また、加盟登録に関しては一部から電子化への期待があり、対応することにしました。結果的にこれも加盟登録の遅れにつながりました。単純に電子化することは簡単なのですが、それに伴う地区学連との連携や翌年の加盟登録への影響を考えるうちに時間がすぎ、また、電子登録を始めるための文書を作成しなければならず、時間を費やしてしまいました。

さらに、私的な部分でも平成13年度に入り若干生活に変化があり事務局の仕事にこなせる自由な時間が減り、様々な仕事の遅れへとつながりました。

こういうわけで、加盟登録業務は大幅に遅れ、

その後の作業が後手後手になってしまいました。また、前任の平沢君から事細かに業務内容を聞くことを怠ってしまったためにやらねばならない業務の数多くをおろそかにし、その後対応に追われることになってしまいました。

このころから、週数回の事務局勤務が個人的な時間を圧迫し始め、何のために事務局の仕事をしているのかを考えるようにもなりました。

事務局長を引き受けてしまったからには仕事をやるしかないのですが、この心の迷いが事務局から足を遠ざけ、さらなる仕事の遅れにつながり、多くの人に迷惑をかけることになってしまいました。

こういう気持ちを抱えていたせいか賛助会員獲得も進まず、賛助会員数は少ないままでした。そして夏が過ぎ学連名簿を発行すべき時期になりました。前年の平成13年度学連名簿は私が編集したのでやり方もわかっており編集自体は気軽に構えていたのですが、いざ発行しようにも賛助会員数が少なく、発行しても実質的に意味をなさない状況でした。そこで発行をしばらく遅らせることにしました。しかし、秋に入り学業が忙しくなりそれどころではなくなってしまいました。やらなくてはならないことがたくさんあり、また、やりたいことがたくさんある状況でプレッシャーに押され考えたくないことから逃げ出すようになってしまいました。今思うと全く情けない限りなのですが、まったくやる気をなくしてしまいました。やらなきゃいけないというプレッシャーが空回りし、また、自分の仕事の不始末ぶりを振り返るたびに情けなくなり落ち込むという悪循環に陥り、すっかり仕事に手が着かなくなってしまいました。結局学連名簿は平成13年度中に発行されることなく平成14年度へずれ込んでしまいました。

その後はたまにやる気を出して仕事をするもののその他は、ののりくらりとせっぱ詰まった仕

事のみを漠然とこなすだけで、いぶきの発送を行う広報部長の小林君をはじめ日本学連幹事・地区幹事の皆さんに多大なる迷惑をかけてしまいました。また、事務局に地図を注文いただいた方々にも迷惑を掛けてしまいました。さらに、インカレ業務ではエントリー担当の石原さん（東京大卒）にも迷惑を掛けてしまいました。皆さんに心からお詫び申し上げます。

しかし、この 1 年間、自分は何のために事務局長をやっているのだろうかということに、はっきり結論を見いだせませんでした。事務局長を務めた事自体には将来意義を見いだせるのですが、現実において事務局長の業務をこなす動機づけははっきりとはわかりませんでした。事務局長を引き受けたからには責任があるわけですが、学業だってお金を出してくれる親に対し責任があります。その他のこともやはり責任があるものが多いのです。やらなければならないことが自分のキャパシティを越えた場合、やらなければならないことに優先順序を付けなければならないが、その場合、どうしても事務局の優先順序は高くなりませんでした。

一部の人から、仕事をしていないのはかつてない汚点であると言われましたが、そのようなことを言われても事務局長という仕事を立派にこなすということをステータスとも思っておらず、ボランティアで事務局長をやっているだけなので、やる気を出す動機とはなりません。不名誉だとか無能だとか言われてもいっこうに構いません。ただ、たくさんの人に迷惑をかけてしまったのは大変申しわけなく思います。

3 やったこと

加盟登録の一部電子化 初めて、紙ではないデータでの加盟登録を受け付けました。まだまだやり方が洗練されてなく数多くの問題点があるのですが、データでの加盟登録の道を開いたという点で意義があると思いま

す。

学連事務局にはなぜ今までできなかったのか TheCARD というデータベースソフトウェアが導入されています。このソフトウェアは初めて事務局員をやる初心者にも比較的簡単に扱えるソフトなのですが、その代わり柔軟性に欠け融通がきかないという欠点がありました。

デジタルデータで加盟登録名簿を受け付けても、事務局のデータベースに反映させるにはかなりのテクニックが必要でありあまり効率が上がらないという問題があり、いざ電子加盟登録を導入しても翌年度に引き継げるかという点で疑問が残りました。

しかしながら外からの圧力も大きく、電子化に踏み切りました。その結果、電子データにより加盟登録をしていただいた大学は全体の 1 割程度でした。電子データは簡単にデータベースに入力できる反面、人間によるチェックが甘くなります。今回は電子加盟登録を行った大学が少なかったため全て目で一通りチェックを行い、加盟登録番号間違えなど数カ所を訂正しましたが、今後加盟登録の電子化が進んだ場合に向けチェックの自動化が求められると思います。また、今回はデータベースを融通が利かない TheCARD のままで行いましたが Access など、柔軟な処理ができるデータベースへの変更も考慮すべきと考えます。

加盟登録データベースの全電子化 加盟登録データを事務局のデータベースに入す際、平成 12 年度までは加盟登録番号・氏名・性別など、インカレエントリーを行うのに必要最低限のデータのみを入力してきました。

それに加えて平成 13 年度では住所・電話番号など全ての情報を電子化しました。これは、2003 年度の加盟登録をさらに効率よくするための布石となるものです。平成 13 年度の失敗をふまえ、平成 14 年度では簡単で効率の良い加盟登録が行えるよう平成 14 年度事務局長の浜端君と協力していきたいと思えます。

第2部 活動報告

学連・加盟校間で
学連メーリングリストの開設
の円滑な情報交
換の手段として orienteering.com 上にメーリン
グリストを昨年秋頃開設しました。平成 14 年 4
月の時点で流れたメールの件数が 20 余件と現在
活発に活用されているとは言い難い状況ですが、
いろいろ活用方法があるかと思えますので今後
に期待したいと思います。なお、平成 14 年 4 月
現在、管理人は私ですが今後は次期事務局長の浜
端君、あるいはほかの人に引き継ぎたいと思いま
す。

インカレエントリーの一部
電子化
インカレのエ
ントリー作業を一
部電子化しまし
た。なおこの件は矢板インカレ実行委員会エント
リー担当の石原さん（東京大卒、平成 11 年度日
本学連事務局長）が主に行ったことで、残念なが
ら私自身は実作業をほとんど手伝うことができ
ませんでした（本来は手伝うべき）。したがって、
電子化した結果がどのようになったかはっきり
とはわかりませんが、電子化への道筋はつけまし
た。

この場を借りてご尽力下さいました石原さん
に感謝申し上げます。

事務局員の育成
人材を育てるということは大
変難しいことで、ここ 2 年程度
成功しているとは言い難い状況でした。人材が育
たないということは、上級生が下級生に事務作業
を教えるという事務局において、下級生を指導す
る上級生がいなくなることを意味し、事務局の崩
壊に直結します。平成 14 年度ではその点をふま
え、事務局の基本作業をマニュアル化し、また下
半期には業務の高効率化をはかるべく各人の役
割分担を明確化し責任をもたせました。

その結果、事務局員が事務局にきても上級生が
いなければ何もできないという状況は若干改善
されたと思います。しかしながらそれぞれの担当
を統括すべき事務局長の私が後半にやる気を
なくしてしまったために、残念ながら最後までう
まくいったとはいえませんでした。

来年以降も、よりよい方法を考えてほしいと思
います。

前述の役割分担と
会計に関する業務の効率化
同じくして、会計に
関する業務の効率化を計りました。具体的には作
業のマニュアル化・日本学連会計との連携強化・
情報管理の強化を行いました。

作業のマニュアル化では、昨年度ただ漠然と行
われていた郵便振替通知書類などに関する作業
を明文化し、保管する場所や取り扱い方法をあら
たに取り決めました。それにより事務局員間での
スムーズな業務連携がはかれると期待されます。

また、日本学連会計との連携強化・情報管理の
強化では事務局に関するお金の動きをデータ化
し、日本学連会計へ逐一報告するようにしました。
以前までは日本学連会計担当者が事務局に赴き
書類を持ち帰るということになっていましたが、
連携強化により手間が大幅に削減されると思わ
れます。また、データ化により日本学連会計への
報告後も事務局に振り込み情報等の情報が残る
ため、入金問い合わせなどに迅速に回答できるよ
うになります。

これについては今後もしっかり続けてほしい
と思います。

4 やれなかったこと・失敗したこと

事務局の電話
一時期、電話料金不払いにより N
T T から止められてしまいました
た。これは、私と日本学連会計の金田君との連絡
不足が原因です。電話が止められていた間、茨城
県協会の小比賀様をはじめ多くのご迷惑をかけ
てしまいました。

本来 4 月に出すべき地区学
地区学連との連携
連との連携のやり方を記し
た書類が大幅に遅れてしまいました。加盟登録の
電子化を控えていたので、前年のものを丸ごと使
い回すわけにはいかず、新たに作る必要があった
ため、また、事務局業務に対するおごりもあり、
4 月に発送することができず、そのままずるずる

と遅れてしまいました。

また、加盟申請に関する連携もうまく行うことができず、多くの人に迷惑をかけてしまいました。

加盟登録書類の誤り 加盟校・準加盟校の加盟金の把握が甘く、誤った金額を加盟申請書類に記載してしまいました。当時、前年度の書類をもとに平成 14 年度の書類を作成したのですが、前年度の書類に誤りがあったために、そのまま誤りを引き継いでしまいました。もう少し確認が必要であったと思います。

また、年齢に関する記述も間違っていました。これは私の単純な勘違いによるもので反省しております。

学連加盟金請求の遅れ 加盟登録業務が遅れてしまったこと、加盟金金額の曖昧な認識、地区学連との連携のまずさ、により地区学連へ加盟金を請求するのが 3 月と、非常に遅くなってしまいました。ご迷惑おかけしました。今後このようなことがないように後輩を指導したいと思います。

学連名簿発行の遅れ この文章を書いている時点（平成 14 年 4 月）で、平成 13 年度学連名簿はまだ発行されておられません。賛助会員のみなさま、学連関係者のみなさま、ご迷惑をおかけしております。責任を持って必ず発行いたしますので今しばらくお待ちいただきますようお願い申し上げます。

幹事としての業務 先に述べたとおり平成 13 年末からやる気をなくしてしまい、電子メールをため込んでしまいました。ため込んだ件数は関係ないメールも含め 2000 通ほどになりました。幹事は電子メールを読むべきなのですが、それを怠ることになり電子メール上で議論することができず幹事をはじめ様々なひとにご迷惑をかけました。ごめんなさい。

事務局の問題点・今後の課題

事務局員構成 現在、日本学連事務局員は早稲田大学オリエンテーリングクラブ

と東京大学オリエンテーリングクラブの人々によって構成されています。しかし、事務局のある目白区目白台に近い早大 O C は人員が減少し、事務局員をやってくれる人もわずかになってしまう東大 O L K が事務局員のほとんどを占めるに至りました。

その結果、東大 O L K が合宿や地図調査を行う期間は事務局は崩壊状態になります。東大 O L K は毎年 6 月に大会を開催しますが、その準備には多くの人・時間を費やします。3 月・8 月・9 月はずっとオリエンテーリングに関することをやっているということもまれではなく、その結果、3 月・8 月・9 月は事務局は機能しません。

また、2 月や 7 月など多くの合宿が行われる大型休暇前の期間は事務局員はテスト直前やテスト期間中と重なってしまい、うまく機能しません。事務局に行くこととテスト勉強をすることを比べた場合、多くの事務局員は事務局を切りテスト勉強を優先させてしまいますが、学生の本分である勉強を妨げてまで事務局へ通うことを事務局員に強要することはできません。

この問題の解決方法の一つに多くの大学の人に事務局員をやってもらうというのがあげられます。構成大学を増やすことにより事務局が機能しない時期を減らせると考えます。

現在の事務局員の中には事務局から遠い神奈川・相模原に住む者もいます。事務局から少しくらいでは事務局員ができない理由にはなりません。東京近郊お住まいのみなさん、どうぞご協力お願いします。

電子メール 事務局は平成 11 年度にインターネットに接続されました。それにより電子メールアドレスを持つようになりました。しかしながら平成 12 年度、平成 13 年度ともうまく活用されているとは言い難い状況にあります。

その原因は事務局に届いたメールが定期的に読まれていないことです。私の力不足により事務局員にメールを読むことを徹底させることができず、事務局へはメールで連絡できない、という状況を作り出してしまいました。また、電子メー

第2部 活動報告

ルによる伝達は、読む側が複数いる場合、やり方を徹底しないと要件が未処理なのか処理済みなのか、また誰がいつ処理したのかという点であいまいになり、不確実性が増します。事務局への電子メールの不信もあいまって、電子メール連絡のほかに電話でも事務局に連絡があるケースが多く、混乱に拍車がかかる事態となっています。

今後は、電子メールを全ての開局日に確実に読み、処理したらメールを既読にし、誰がいつ処理したのかを記入するノートを作る、さらに事務局への連絡を、緊急時を除き電子メールに一本化するなどの対策が必要だと思えます。

また、事務局宛のメールを事務局長が全てを処理する方法も考慮に値する方法だと考えます。いずれにせよ、平成14年度の課題です。

なお、当初、事務局員の中には電子メールを学校でしか使用したことのない局員がおりインターネットにダイヤルアップで接続する方法を知らない局員もいました。

このような事態は電子メールに慣れていた自分にとっては全く想定していなかったことでかなりの驚きでしたが、その後、その事務局員は無事インターネットを使えるようになっていきます。

インターネットは普及しており、今後はこのようなケースは減ると考えられます。

先に述べたとおり、時期に
地図販売の不完全性
よってはまったく事務局が機能しなくなる時期があります。その間に地図の注文が留守電話に入った場合、しばらくの間放置される事態になってしまいます。また、時間がたって留守電を読み出す際、録音された時期があまりにもかけはなれていると、本当に未処理なのか疑わしい状況になります。事務局長・事務局員がちゃんと定期的に事務局に通いきちんと仕事をこなせば解決する問題ですが、事務局が機能しない場合大きな問題になります。

事務局員の構成に関する問題が解決しない以上、事務局が機能しなくなる時期は必ずあるわけで、何らかの対策が必要になります。現在、事務局では長期休暇中を短期開局期間とし、開局日は

週1日程度になっています。しかし、平成13年度はそれすらうまく機能せず破綻しました。

今後の方向性として、不確実な短期開局をやめ、3月・8月は閉局といったふうに事務局閉局期間を明確に定め、その期間中の地図注文などは事務局長のみが受け付けるというような方法が考えられると思います。

事務局員間の業務連携
気を許すとすぐに事務局は散らかってしまいます。その結果、書類があちらこちらに置かれ電子メールと同じように、未処理なのか処理済みなのかわからなくなってしまいます。

一人で事務局を運営する分にはなんとかできるので、複数人のチームで運営している以上、状況がわからないという事態は問題がありません。平成13年度において、作業をマニュアル化し、また作業用の箱を設置することにより若干の改善がありましたがさらなる改善が必要だと思えます。

5 最後に

今年1年間をふりかえると、全くふがいない思いになります。その思いを踏まえ、後輩に対ししっかりと資料を残していきたいと思えます。

最後になりましたが今年1年間事務局員として働いてくれた以下の11名に感謝申し上げます。

下西哲史 (東京3)
横井温子 (津田塾3)
橋口英司 (東京2)
森脇崇 (東京2)
末岡千枝 (津田塾2)
渡辺桃子 (津田塾2)
加瀬希 (東京女子2)
小田尚徹 (早稲田2)
神谷実 (早稲田2)
滝雅人 (東京2)
浜端紀行 (東京2)

(順不同・敬称略)

